

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

| | |
|-----------|---|
| タイトル | 関口隆三先生ご略歴 |
| 別タイトル | Retired Professor Ryuzo Sekiguchi: Curriculum Vitae |
| 作成者（著者） | 東邦大学医学会編集委員会 |
| 公開者 | 東邦大学医学会 |
| 発行日 | 2022.03.01 |
| ISSN | 00408670 |
| 掲載情報 | 東邦医学会雑誌. 69(1). p.22-25. |
| 資料種別 | 学術雑誌論文 |
| 内容記述 | 退任記念 |
| 著者版フラグ | publisher |
| JaLCOI | info:doi/10.14994/tohoigaku.2021_051 |
| メタデータのURL | https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD62157461 |



関口隆三先生ご略歴

1956年5月26日生

- 1983年3月 東邦大学医学部卒業
- 5月 第75回医師国家試験合格（医籍登録第275318号）
- 6月 東邦大学附属大橋病院放射線医学研究室 研修医
- 1984年6月 同 助手
- 1985年8月 米国インディアナ州立大学放射線腫瘍科留学
- 9月 米国スタンフォード大学放射線生物学 リサーチフェロー
- 1986年11月 東邦大学附属大橋病院放射線医学研究室 助手（帰局）
- 1987年6月 国立がんセンター中央病院 画像診断レジデント
- 1990年6月 東邦大学附属大橋病院放射線医学研究室 助手（帰局）
- 1990年10月 医学博士取得（東邦大学乙第1437号）
- 10月 国立療養所松戸病院放射線科 医師
- 1992年5月 東邦大学医学部 客員講師
- 1992年7月 国立がんセンター東病院放射線部第一放射線科 医師
- 1992年11月 同 放射線診断室 医師
- 1999年12月 同 臨床検査部生理検査室 医長
- 2002年5月 同 放射線部放射線診断室 医長
- 10月 同 臨床開発センター機能診断開発部（併任）
- 2007年1月 栃木県立がんセンター画像診断部 副部長
- 4月 同 画像診断部 部長
- 4月 同 検診研究室 室長（併任）

2013年10月 東邦大学医療センター大橋病院放射線医学講座 臨床教授
現在に至る

専攻分野

腹部画像診断, 乳腺画像診断

専門医・指導医

放射線科専門医, 放射線科診断専門医, 超音波専門医, 超音波指導医, マンモグラフィ読影認定医 (評価 A), 日本医師会認定産業医, 第1種放射線取扱主任者

学会の役職 (公的委員会活動などを含む)

日本超音波医学会代議員・超音波検査士制度委員会委員・乳房造影超音波診断基準検討小委員会委員, 日本総合健診医学会超音波合同委員会委員, 日本画像医学会評議員, 日本乳腺甲状腺超音波医学会幹事, 超音波ドプラ・新技術研究会幹事, 日本腹部造影エコー・ドプラ診断研究会世話人, Radiology Ultrasound 研究会世話人, 超音波スクリーニングネットワーク理事長

主催学会・研究会

第34回超音波ドプラ研究会 (2013年9月7日), 日本超音波医学会第31回関東甲信越地方会
学術集会 (2019年10月19・20日)

退任にあたって—今日までそして明日から—

関口 隆三

東邦大学医療センター大橋病院放射線医学講座

2013年10月、東邦大学医療センター大橋病院放射線医学講座の臨床教授に着任した。それからあつと言う間の8年5ヶ月間が過ぎ去り、今退任の時を迎えている。この間、色々と私をご支援、ご協力いただいた皆さん、特に東邦大学医療センター大橋病院や大森病院の皆さん、そして東邦大学ラグビー部の皆さんや超音波スクリーニングネットワークの皆さんには大変お世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

さて、私が臨床教授に着任してから教育に関して行ってきたこと、また診療に関して思ったこと、私のこれまでの医師人生について振り返ってみたい。

教育について

画像診断の基礎は解剖学的知識である。現在、画像診断の主軸となる検査はCTやMRIなど、断層面の所見から診断する検査であり、断層解剖学的知識が要求される。卒前教育（学生教育）の中では解剖学と断層画像診断とを連動させた断層解剖学を導入し、より臨床実践的な解剖学を通じた放射線診断学を指導した。

卒後の研修医に対しては、自分の行う医療行為に対して興味を持てる、また役に立っていると実感できる教育指導が大切と考え、医療の現場での実践に即した教育指導—「面白い」「なるほど」と実感できる教育の実践を図った。

対外的にはここ20年は、超音波検査に携わる医師、技師のレベルアップ向上を目的とした超音波教育および指導に従事している。現在、NPO法人「超音波スクリーニングネットワーク」の理事長として、超音波検査に携わる医師、技師のレベルアップ向上を目的に年1回の講演会（2021年度の参加者数は1379名）を開催している。

診療について

画像診断機器の飛躍的な進歩により、短時間により詳細に、より広範囲の検査が可能となった。検査1件あたりの出力枚数は数100枚となり、放射線医の読影業務量は飛躍的に増してきている。当センターで問題視されているのは、他医療機関同様、読影業務量に対する読影医不足であり、これを解決するためには放射線医の確保が最重要課題であ

るが、医局員の確保は充分とは言えない状況下にある。読影業務に追われるため、座学が中心とならざるを得ず、自らが検査に従事する超音波検査や消化管透視、IVRなどは教育を含め、満足のいく状況にはなっていない。また検査は技師任せとなっているきらいがあり改善が望まれる。

私の歩んだ道

1983年3月、東邦大学医学部卒業後、附属大橋病院放射線医学研究室に入局（主任教授：故浜田政彦先生）。研修医、助手、アメリカでの研修を経て1987年6月からは国立がんセンター中央病院に画像診断19期レジデントとして勤務した。国立がんセンターでの3年間の研修、またここでの諸先生方との出会いがその後の私の医師としての「道しるべ」となった。画像診断では、消化管造影（食道、胃、小腸、大腸）、消化器内視鏡、CT、超音波、血管造影を中心に研修し、切除標本や病理所見との対比を通して画像診断を学ぶことができた。レジデント終了後は一旦大学に帰局したが（ここで現教授の五味達哉先生とお会いしたと思う）、国立がんセンター東病院の開設準備に誘われ、平松慶博教授に無理を言って1990年10月、準備室がおかれていた国立療養所松戸病院に仕事場を移した。国立がんセンター東病院には開設時（1992年7月）より勤務し、2007年1月からは栃木県立がんセンター勤務と、がんセンター畑を渡り歩いた。国立がんセンター東病院ではCTや超音波、消化管造影を中心に、栃木県立がんセンターではこれに造影超音波を加え、腹部および乳腺領域のがんの画像診断法および検査・治療手技について研究した。公的研究では、厚生省や厚生労働省のがん研究助成金による研究班の分担および主任研究者を務め（1998年～2011年）、「画像診断に基づく消化器がん、肺がん、乳がんのclinical stagingの確立と治療法選択に関する研究」において、4年間主任研究者を務めた（2004年～2007年）。2013年10月、東邦大学医療センター大橋病院放射線医学講座 臨床教授に着任。大会長を務めた日本超音波医学会第31回関東甲信越地方会学術集会（2019年10月19・20日、東京開催）では1,785名と多くの参加者を迎え、成功裏に終わることが出来た。これはひとえに皆様のご協力の賜と感謝している。この「感

謝—ありがとう」の気持ちを一生忘れずに心にとめておきたいと思う。

最後に、医師としてこれまでに「…たら」「…れば」と後悔すべきことが数多くありました。これからも常に目的意

識を持って、それを自立的に実践する努力を怠らないように心掛けていく所存です。

DOI : 10.14994/tohoigaku.2021-051



写真 日本超音波医学会第31回関東甲信越地方会学術集会 (2019年10月19・20日)